神奈川県の教育の 取組み を紹介します

小学校

教科等横断的な学習から月や太陽の大きさのイメージをつかむ

小学校では、組織的な指導力・対応力の向上による魅力ある学校づくりをめざした教科担任制を推進しています。専科教員や学級担任が特定の教科指導を担うことで、質の高い授業をめざすとともに、多くの教員が子どもたちに関わることで、児童理解が深まるなどのメリットがあります。「月と太陽」の学習では、子どもたちにとってなかなかイメージがつかみにくい天体の大きさをわかりやすく説明するために、担当の専科教員は算数の授業で学習した縮尺を使って説明しています。子どもたちは教員が用意した10億分の1スケールの太陽の大きさに驚きます。「この大きさの太陽がこの位置にあると、地球はどのあたりかな？」宇宙の大きさに子どもたちは興味を示します。担任が複数教科を担当していることを活かして教科等横断的な学習を行うことができることも小学校教員の大きな魅力の一つです。また、授業では一人一台端末を用いて、クイズを行ったり、動画を視聴したりするなど、子どもたちの興味を引き出しながら、わかりやすい授業が行われています。

どのように授業を行えば、子どもたちが興味・関心をもって、わかりやすい授業ができるか。子どもたちと向き合いながら日々教材研究に励んでいます。

中学校

主体的・対話的で深い学び ペリーの再来航について議論する

「ペリー再び来航！鎖国する？開国する？」開国と幕府政治の終わりについて学習する中学２年生の社会科の授業では、担当教員の立てた問いに対して、生徒たちが、鎖国を続けるべきかどうかについて、意見を交わし合う姿が見られます。「私は、今までも不自由がなかったのなら、日本文化を守るために、鎖国を続けた方がいいと思う」「いや、開国しても、文化は守られると思う」「それよりも、米国との関係が悪化することの方が恐ろしいから開国すべきだよ」「でも、開国したら、日本は大きく変化して混乱すると思うな」議論が活発になる中、担当教員が「実際は、どうだったのか見てみましょう」と言って林大学頭とペリーの交渉を再現した動画を見せました。生徒たちの目は、真剣そのもの。教室は、江戸時代にタイムスリップしたような空気に包まれました。

最後は「日米和親条約について、どう考えるか」という問いで、次回の授業につなげました。「正解は、一つではない。大切なことは、自ら考えること」生徒の学びを深めるためにどのように授業を展開するか考えることは、教員という仕事のやりがいの一つです。

高等学校

インクルーシブ教育実践推進校の取組み

神奈川県では、「生徒の学びと成長にとって何が必要かという視点を最優先にする」という基本的な考え方に立って、すべての県立高校で改革を進めています。

その取組みの一環であるインクルーシブ教育実践推進校（※）は、共生社会の実現をめざし、すべての生徒が共に学ぶことを通して、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力を育む教育に取り組んでいます。また、教室のユニバーサルデザイン化や教員2名でのティームティーチングによる授業等によって、誰にとっても学びやすい学校づくりを進めています。

インクルーシブ教育は、生徒一人ひとりを尊重しながら誰もが学びやすい学校をみんなで考えていくという教育活動です。生徒の将来の希望や目標の実現に向けて、一人ひとりの個性や能力を伸ばす質の高い教育の充実を図り、教員自身も「共に学び共に育つ」ことの大切さや意義を実感しています。

※インクルーシブ教育実践推進校では、知的障害のある生徒が高校で学ぶ機会を拡大するためにインクルーシブ教育実践推進校特別募集を実施しています。

特別支援学校

様々な職種で子どもの可能性を広げる

特別支援学校には、医療的ケアを必要とする子どもも多く在籍しており、神奈川県では、学校で実施するすべての医療的ケアを、教育の一環（自立活動）として位置付けています。医療的ケアの代表的なものには、痰の吸引や経管栄養などがあり、研修を経て認定証を取得した教員は看護師と連携を図りながら子どもが安全・安心に学校生活が送れるように支援しています。

また、多くの特別支援学校では、子どもの実態把握や個別の目標、目標に対する評価など、教員が必要に応じて理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、心理職の専門職に相談することができ、子どもの指導や支援方法がより良いものになるよう、みんなで考えながら進めています。

このように、教員、看護師、専門職がそれぞれの専門性を発揮し、協力し合いながら教育活動を進めていくことは、一人ひとりの子どもの可能性をより広げ、将来の自立と社会参加に必要な力を育むことにつながっています。